

第11回「京都御苑ずきの御近所さん」
植彌加藤造園株式会社社長

加藤友規 様



■多くの社員を率いるお立場ですが、社長としての日常の心構え・信念を教えてくださいませんか？

一人一人の「やりがい」を一緒に仕事の中に発見していくことを心がけています。

私自身がもともと体育会系の出身で、小中高とサッカーをやっていました。サッカーを通じてチームみんなでいろいろ作戦を練ったり、強くなるために練習方法を改善したりしていました。サッカーはコンビネーションや戦術が重要なものの、個人の技量がベースにあるので、作戦などを考えるのは面白いものでした。岡崎中学生の時にはキャプテンをやっていて、練習方法をどう改善していくか、全国大会に出場するというみんなの目標をどうやったら成し遂げられるか、目標を持ってみんなと取り組むことが面白くとても充実していました。私自身が仲間を束ねるといよりも、そこに集った者たちとともに私もそこに居て、チームの目標に向かって頑張っていました。それが終わった時の達成感ややりがいなど、経験値を積み重ねてきましたので、大人になってもサッカーという一つのスポーツ競技から、次は職場のみんなでどういうことができるかと発想するようになりました。

サッカーは11人でプレイしますが、今の社員の数は、造園技術に従事するスタッフとサービス部門のメンバーを併せると100人を少し超えるくらいです。どれだけやりがいのある仕事を探し出すかということと、その仕事を通じてやりがいのあるものを提示していくかということが、私の心構え・信念だと考えています。今の社員の数は、造園技術に従事するスタッフとサービス部門のメンバーを併せると100人を少し超えるくらいです。どれだけやりがいのある仕事を探し出すかということと、その仕事を通じてやりがいのあるものを提示していくかということが、私の心構え・信念だと考えています。

■社員の方々が主体的に学会などで発表されていますが、日々のお仕事の蓄積の方法や、発信の仕方で工夫されている点はありますか？

先日、日本造園学会関西支部の50周年大会で我が社の職員が発表した無鄰菴の庭園管理についてですが、自分たちが取り組んだ仕事に対してやりっぱなしにするのではなく、自分たちがどういうことをしているのか、きちっと振り返ることが必要だと思います。また、それを世の中に発信していくことも大切なことと思っています。私自身、日本造園学会の理事を務めさせて頂いている中で感じるのですが、私たちの仕事というのは現場と研究の両方を見据えなければならないと思います。そうでなければ、現場ですごくよいことをしていても、結局携わっている人しか知らない世界になってしまうんですね。しっかり記録し世に発信する、そういうふうにもう一歩努力をしないと、仕事に携わっている自分たちだけ楽しさを実感して終わりになってしまいます。そうではなく、より多くの方にその魅力や楽しさを理解してもらうための取り組みが必要だということを強く感じます。それは、広く社会に向けてということだけに限りません。我々の小さな職場の中だけでも、複数の現場が同時に仕事をしていますので、違う現場で経験しているもの同士、意識を持って情報や経験を共有しないと、自分の経験値だけしか高まらないということになってしまいます。私の方針として、常に職員には「伝統から学ぶ、仲間から学ぶ」を意識して取り組んでもらっています。「仲間から学ぶ」ということは、一つの会社が手掛けている一つの現場の中で、担当者・関係者だけが情報や経験を持っていて、他の人は別の現場で必死になって働いてみただけでは成り立ちません。無鄰菴には直接関わらない社員に無鄰菴での学びを得る機会を設けることが必要です。

我が社では、現在、指定管理者業務を無鄰菴と岩倉具視幽棲旧宅、けいはんな記念公園の3箇所を実施いたしております。けいはんな記念公園は、お蔭様で11年目になります。とても素晴らしいところですが、うちの職場の中でも、けいはんな記念公園の担当者だけが知っていて、他の現場の担当者の中にはあまり行ったことがない、知らないということがあります。我々の仕事というのは、ずっと先輩たちが築き上げてくださった、昔からの心と技がしっかりと蓄積されています。それを知らずに今の仕事だけに専念することは勿体ないことです。身近な仲間がやっていることを共有する努力をしています。勉強会など現場を止めてでもみんなが集まって、現場が竣工したら発表してみんなで聞いて、この仕事の楽しさみたいなものを共有しています。それがみんなの物心両面の幸せにつながると信じています。私たちの仕事は、伝統的なものですが、我々がきちっとそれを先輩方から受け継ぎ、消化して、よいものにして、より深い伝統として次の世代に渡していけること自体とても素敵な社会貢献だと思います。そういう意味で、一生懸命やっていることが、大そうに言えば「人類社会の進歩発展に貢献すること」なので、みんなには自信を持ってやってもらいたい。私は「伝統を継承する」という言葉を使いません。「伝統は創造していくもの」、さらにクリエイティブな深いものとして受け継いでいくものだと思っています。伝統をさらに創造していくことにみんなが携わっている、その自覚を持ってやれば、物心両面の幸せということになっていくと考えます。

職人さんは、実はすごい腕前を持っています。しかし、それをわざと他人に見せつけるよ

うなことはしませんね。その技が誰にも伝わらず、もし消えてしまったら本当に勿体ない話だと思います。そのようなことにならないよう、我が社に「知財管理室」を設け、職人やスタッフなど、いろいろな人たちが持っている知識の掘り起こしを始めています。決して現場の暗黙知をわかりやすい形式知にしようという意味ではありません。暗黙知を共有することの困難さと大切さを知るために形式知の層を形づくる作業を行っています。先輩たちの感性・美意識、物の見方をお手本にして、そこから最終的に「自分はこうだ」みたいなところまでつくり上げていければと思います。これは庭師だけではなく広く一般的に共通するものです。

作庭記の中に、「むかしの上手のたてをきたるありさまをあととして、家主の意趣を心にかけて、我風情をめぐらして、たつへき也。」とあります。昔の名人の仕事をお手本とし、施主の意向も汲んで、「我風情をめぐらして、たつへき也」と言っています。平安時代の人先輩の仕事をちゃんとお手本にしなさいと言っている訳です。私の理念である「伝統から学ぶ、仲間から学ぶ」の「伝統から学ぶ」は、まさに「むかしの上手のたてをきたるありさまをあととして」と同じことです。いっぱい仲間から学んで、最後は我風情でやっていく。それはすごく奇天烈で特殊なことを提示するということでは全然ありません。原理・原則的なものがずっと平安時代からあり、その原理・原則的なものを真面目に取り組んでいる庭師というのが、きちんとそういうものを身につけていくように見えます。特別なことは何も言っていないで、本当に首尾一貫していますね。

■インターネットで御社の取り組みを多言語で情報発信されていますが、そのきっかけや、御苦勞についてお聞かせください。

さほど苦勞はありません。我が社の取組を3箇国語に翻訳してホームページに掲載していますが、翻訳は社内のスタッフが対応しています。きっかけは、昨今クライアントが国際的になってくる中で、職場の中でもそれに対応できるような体制にしておかないと仕事にならないなと思い、そういうところから生じてきました。画期的なことをやろうとしたのでは決してなく、普通にお客さんが英語で言われるのにこっちが何を言われているのかわからないと言っていたら仕事になりません。しっかりと対応できるようにしようということです。海外の仕事もありますが、海外展開をする部署を設けてという訳ではありません。一つは海外のクライアントの方が多いということと、何か御縁があった時にはもちろん海外でも対応できる範囲のことをさせて頂きたいということです。それが仕事としてのやりがいであり、我々にとって望ましいことです。

■加藤様の思い出の中で、京都御苑にまつわるものはありますか？

私は御苑近くの鴨沂高校に通っていましたもので、高校時代はすぐ目の前ですから部活などでよく来ていました。鴨沂高校は残念ながらちゃんとしたグラウンドのない学校ですので、トレーニングをするのにも、御苑の中を走っていました。京都御苑はトレーニング場でしたね。グラウンドではサッカーボールを蹴ってみんなで練習をしていました。

■京都御苑で好きな場所、好きな時期などありますか？

いつの時期も京都の中でこれだけの緑地空間があるところにはない、それにこれだけいろんな歴史を感じられるところはないと思います。私は、緑と歴史の両方を感じられる場所が好きです。特に一番好きな季節は、やっぱり落ち着いた時期です。秋や春の頃の雰囲気が好きです。私は庭園の専門家ですので、御苑空間の中に九條邸や閑院宮邸、近衛邸といった庭園の遺構が存在するというのはとても感慨深いですね。

2016年11月29日 インタビュー

聞き手：田村省二，山本昌世

○加藤 友規さま プロフィール○

1966年、京都府生まれ。千葉大学園芸学部園芸経済学科卒業後、家業を継ぐため植彌加藤造園株式会社に入る。2005年、代表取締役社長に就任。12年、京都造形芸術大学大学院芸術研究科芸術専攻博士後期課程修了。13年、日本造園学会賞（研究論文部門）受賞。国指定名勝庭園や京都の寺院庭園を数多く手がけている。京都造形芸術大学客員教授。